

道程

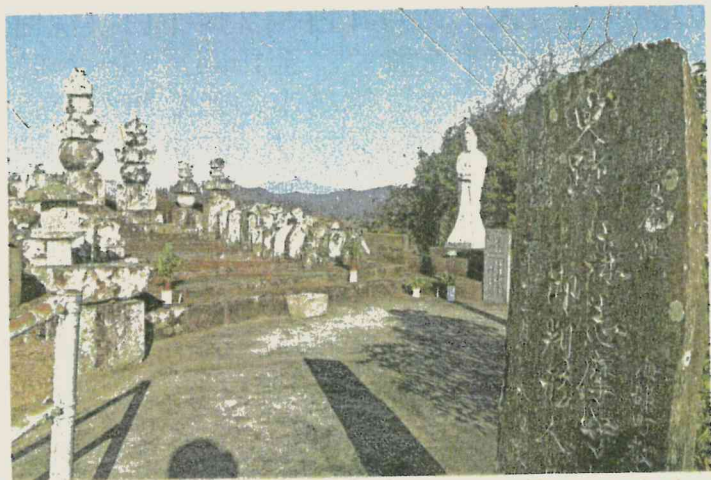
判形人の墓守 木内正和さん(73) 海陽町柄浦

海陽町柄浦の木内正和さん(73)は、江戸時代に「判形人」と呼ばれた人々の末裔だ。蜂須賀家の殿様が土佐との国境警備のために出した特別な判物(判のある書き付け)を持つ身分だった。徳島では唯一で、木内家がリーダー格だった。木内さんは、先祖が判形人だという誇りを胸に長年、墓守を続けてきた。

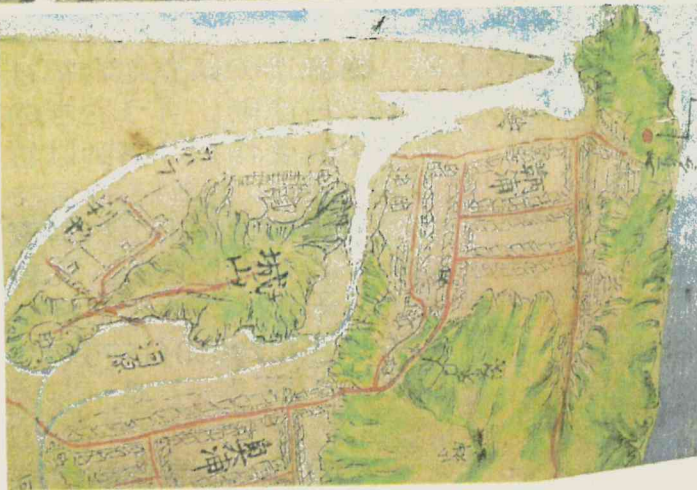
自宅がある敷地は江戸後期の絵図に「判形」と記されている。現在は墓所とともに海陽町の指定史跡に入っている。今年1月には、自らの先祖と、先祖の仲間36人の供養祭をして霊を弔った。地元では歴史と伝統を受け継ぐイベントとして住民有志の協力があり、静かな注目を集めた。木内さんは語る。「大名や武将の墓は文化財になるものは多い。判形人の墓の



判形人の墓所に立つ木内正和さん。墓所には判形人がかつて仕えた阿波水軍の総帥森家の先祖の墓もある＝海陽町柄浦



【上】判形人の墓所は海陽町の史跡に指定されている。1月の供養祭には阿波水軍の総帥森家の子孫も訪れた。海陽町柄浦【下】江戸時代は左の絵図の「判形」と書かれた赤線の枠内に判形人の屋敷があった。現在、屋敷跡が海陽町指定史跡で、判形人の子孫で住んでいるのは木内さんだけ。寄せ墓は屋敷跡の左隣の小山の上にある(江戸後期の絵図)



歴史継承へ住民と結束

スケールはそこまで大きくないが、地域の歴史を秘めているのは事実。先祖の墓を守ることは、地域の伝統を守ることにつながる。判形人は同じ由緒があり、室町時代は細川家の家来で、戦国時代は阿波水軍の総帥森家の家臣を務めた。木内さんは、子どもの頃

た。そして江戸時代は蜂須賀家のために働いた。昔は大勢の末裔がこの地域に住んでいたが、今は木内家だけになった。海陽町に残る子孫も他に1人しかいない。「他の家は絶えたか、町を出た」

から墓を定期的に清掃するなど熱心に先祖を敬った。しかし、供養祭に家の代表として出たのは初めてで、重責を感じて背筋が伸びた。以前は12年前に死去した父茂さんが務めていた。「先祖の家が流された」ともある。生活は決して裕

福ではなく、江戸、明治時代の暮らしは苦しかったと聞く。しかし先祖と同様に置かれた場所で生きがいを見つけて生きてよかったと思う。侍の子孫らしく祖父までは代々剣道をした。父は柔道を始め、道場も開いた。

子どもたちに歴史のある町に住んでいるという誇りや、土地に根を伸ばした伝統の大切さも教えた。木内さんが柔道着を着たのは5歳で、5段まで昇段。職業の柔道整復師には25歳でなり、地元で整骨院を開いた。町を出たくなかったからだ。30代以降は、郷土史に詳しくなった父から判形人について学んだ。

「父は、海部刀の研究で知られた故岡田一郎さんの

先輩だった。故郷の伝統を受け継ぐことができるのは、彼らが資料を残してくれたおかげ」地域の先達になろうと町の議員になったのが38歳。5期目の途中まで18年間も続けた。60歳を過ぎた頃から後継者難に頭を痛めた。長男正太郎さんは整形外科として福岡県の久留米大病院で働き、昨年の東京2020五輪で柔道のチームドクターとして活躍したほど。「いずれは帰ってきてほしいが強制はできない」後継者対策の妙案として2018年に設立したのが住民団体「C・S海部」。